

打出教育文化センター・教職員への研修を進めています

問い合わせ 打出教育文化センター ☎38-7130(打出小樋町15-9)

打出教育文化センターでは、市立学校園教職員を対象に講座を開き、教職員の指導力の向上に取り組んでいます。平成18年度も、「専門的な知識や技術の向上を図る」「教育の今日的な課題について考える」「情報教育の充実を図る」などのテーマで研修会を実施し、よりよい教育の実現を目指して、多くの教職員が受講しました。その研修の一部を、ご紹介します。

専門的な知識や技術の向上を図る



ふれあい仲間作り

子どもたちの社会性の向上や確かな学力の定着を図るため、専門家による講演や具体的な演習・実習を通して、指導力の向上を図っています。確かな理論を学び、子どもの想像力をかき立て、仲間と共に学ぶ意欲を育てるワザとコツを学んでいます。

【5月】 初任者研修

【7月】 ふれあい仲間作り～運動会に向けての運動遊び～(写真)/運動好きを育てる体育授業

/学校園の野菜作り～野菜の苗作り～/国語力を育成する実践事例～全校的読書活動の在り方と具体的な単元の作り方～/韓国文化を考える

【8月】 メンタルヘルスマネジメント・プラス思考の心理学～自律訓練法活用～/読解力を育てる国語科の授業～フィンランドの教育から～/算数の基礎・基本とその発展について/道徳の時間の指導の充実を目指して/見直そう! 総合的な学習の時間/教職員のコミュニケーション～聴く・話す～/インタビュースキルアップトレーニング/CM・映像制作に必要な要素～コンセプト作りから絵コンテまで～/プレゼン・センスアップ講座/初任者研修

【9月】 自然を好きになる子どもを育てる

【10月】 初任者研修

【11月】 学校を会場に「合唱・合奏指揮法研修講座」 /学校を会場に「社会科研修講座」

教育の今日的な課題について考える

現在、子どもたちを取り巻く教育的課題は、社会問題となっています。そのような中で、教師全員が子どもたちの健やかな成長を促すために、子どものさまざまな行動や心理への理解、そして、その支援や指導のあり方を研修しています。

【7月】 特別支援教育と軽度発達障害への教育的支援～LD・ADHD・高機能自閉症への関わり方～

【8月】 脳科学の知見から考える幼年教育の課題/子どもの心とシグナルをめぐって～「子どもの危機」を乗り越えるために～/管理職研修「和文化の風を学校園に」/管理職研修「特別支援教育を目指すもの」

【11月】 幼稚園における特別支援教育について～配慮の必要な子どもへの対応～



子どもの心とシグナルをめぐって



幼稚園における特別支援教育

情報教育の充実を図る

コンピュータを生かした教材開発や効果的なプレゼンテーションの方法など、授業への積極的な活用方法について研修しました。また、情報通信ネットワークの効果的な利用の方法や、情報化社会に対応する情報モラル等に関する考え方、指導方法を学びました。

谷崎文学朗読会「源氏物語」 朗読シリーズ第2回「夕顔」

日時 2月24日(土)午後1時30分～3時 会場 谷崎潤一郎記念館 内容「谷崎源氏」の朗読。まるやかな美しさを味わっていただきます。朗読 朗読グループRST 加藤順子氏・松島和子氏 会費 1,000円(入館料・ドリンク代含む) 定員 先着25人 入館料 300円 申し込み 電話、ファクス、メールで下記へ

問い合わせ 谷崎潤一郎記念館 ☎23-5852/FAX38-3244(伊勢町12-15) Eメール ashya-tanizakikan@rhythm.ocn.ne.jp

市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布

写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年(平成2年11月10日)に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー(市役所北館1階)ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。



「芦屋のうつりかわり」 21.6×30.5cm / 135頁 / 紙表紙・銀箔押し(ハードカバー) 頒布額 500円



会下山遺跡と触覚模型

問い合わせ 広報課 ☎38-2006

「広報あしや」バックナンバーは、市ホームページ『広報あしやONLINE』でご覧いただけます。



文・三好美佐子さん 絵・竹本 温子さん



芦屋は、昔から水不足で困っていた。山から海までの土地は斜面で、降った雨はすぐ流れ、山の地中にしみこむ間もなく海に流れこんでしまう。川やため池があっても、あんまり役に立たなかった。猿丸安時さんの時代も、そうだった。その頃の芦屋は、二千人ぐらいの人が住んでいたんやが、ほとんど農家だった。ちよつとでも、雨が降らななら、田んぼや畑の作物がかわれ、しまいはのみ水にさえ困るようなこともあった。水争いや、水どろぼうが絶えなかった。しかし、芦屋を救ってくれる人が現れた。猿丸安時さんという人。

安時さんの家は、古くからこの芦屋に住んでいて、代々、庄屋の家がらやった。安時さんは、自分の住んでいる土地が、こんなに困ることがあるのを、なんとかしなければと考えた。それには、水争いをまずなくしたい。水さえあれば、人びとが争うこともない。そう思い、争っている人びとに、「相手が悪いだけではない。水不足がいけないのだ。」と、言うて回った。しかし、それだけでは、人びとはわかってくれな。んだ。それに、今まで、水がないこと、けんかのもとであることなど、考えもしないことであつた。そんな人たちに、安時さんは、一所懸命、説いて回った。「あしや川をせきとめて、大きいため池をつくればよい。」



初めは「そうじゃ、そうじゃ」と賛成。安時さんは、熱っぽくみんなに言った。心をとめて言った。村人もこれには、勝てん。とうとう、心を動かされた。「よし、やろう。がんばってみよう。」

「よし、やろう。がんばってみよう。」そういって、工事にかかりだした。谷を削り、そこにたくさん石をいれた。積んだ石の上に、土を厚く入れた。木槌でたたいてかため、崩れんように木柵をいれた。こんなことをくり返しているうちに、池の周りに八百メートルの堤防ができた。堤防ができた時、村人は歓声をあげて喜んだ。

ここまでのころ、大変な苦労があった。働いている人たちも、途中でいやがり、こなくなつた人もいた。安時さんは、そんな人でも、やさしくさとし、仕事にもどるようにさせた。みんなも自分の仕事をもちながら工事をするのだから、村人も大へんなことであつた。けれど、一ばんがんばつたのは、やはり安時さんであつた。雨が降つても雪の日でも、現場に安時さんを見ない日はなかつたという。みんなをばげまし、自分にムチうって安時さんはがんばつた。この大工事は、二十年かかって、江戸時代の終わりごろ、やっと完成した。それが、奥池である。水争いはなくなり、水不足で困ること

もなくなつた。安時さんのおかげであつた。しかし、今は、芦屋は変わった。田や畑はほとんどなくなり、人の住む家が多くなつた。安時さんが、苦労してつくつた奥池はどうなつたんやろう。今、奥池は、すぐ西につくられた貯水池と共に、満々と水をたたえ、芦屋の市民にとって大切な水がめとなつている。あの平成七年一月十七日の大地震の時も奥池の貯水池から水が運ばれ、人びとを安心させた。どんな時代でも水は大切やし、きれいな水は、人のくらしにかかせないものである。昔から、水で苦労した人びとのことを忘れんようにしたいものや。

れで村全体が助かるのや。そのための大工事は、やってやれんことやない。なあ、みんな、わしについてきてくれ。きつと、大きな喜びが待っているから。

「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。